

1.120分に及ぶインタビューでしたが楽しすぎて一瞬でした…  
2.取材はアステリアさんの素敵な本社にて 3.身に着けるものはすべてグリーンこれが平野社長のこだわり 4.ワイン好きな平野社長らしく社内にはワインを楽しむスペースまで! 5.靴ぞして靴ひもまでも緑!



見ると構造がよく分かる。時には元に戻せなくなり父に怒られることもありましたが、楽しくて仕方ありませんでした。そして小1のとき、父がソニーのトランジスタラジオを買ってきたのです。そこから毎日のように「ソニーがどれだけすごい会社なのか」を力説するのです。江崎玲於奈博士の話まで持ち出して熱を込めて語る。その話を聞いているうちに私の中に変化が起きました。「将来はソニーの技術者になろう」。そして父がよく言っていた言葉がもう1つあります。「農家は継がんでよか。大学は出て公務員になれ。」

はんだごてを握って回路を組む。電子工作の世界にどんだんのめり込んでいった私が、中3のときに出会ったのが「マイコン」。回路を変えなくてもゲームができたり計算機になったり、いろいろなことができる。まさに「晴天の霹靂」でした。自分で打ち込んだ文字が目の中の機械の動きに変わる楽しさに私はすっかり虜になりました。そして大学進学を考えるころ、「熊本大学が最新のコンピュータを導入する」という情報を手にします。入学すれば最先端に触れられる、そう考えて進学しました。ところが実際に使えるのは4年生や院生。1〜3年生はお下がりの古い機種しか触れない。中3からマイコンに触れている私にとってはぜんぜん面白くない。そこで大学のマイコンクラブに入り、さらに近くのマイコンショップに入り浸るようになりました。お店ですからあらゆるメーカーの最新機種がどんどん入ってくる、お客さんのいないときは自由に触らせてもらいプログラミングをする毎日。気づけば授業にはほぼ行かなくなっていました。

六畳二間のアパートから、世界をつなぐ夢が始まりました

やりたいことはどんどん明確になっていき、大学に通う意味が薄れていく。授業に行く時間が正直「無駄」にしか思えない。でも父からは「大学を出て公務員」と言われている。退学するにも保証人の判子が必要。しかし両親は絶対に押さないと分かっていたので、友人の親に押してもらいマイコンクラブの先輩と2人で学校をやめました。そしてマイコンショップに開発室を作ってもらいソフトウェア開発を始めます。退学してから両親に事後報告に行くと、当然のように逆鱗に触れました。土下座して話をしたのですが「二度と帰ってくるな」と追い出され勘当。荷物まとめて家を出るしかない。もうとにかく前へ進むしかありません。そしてNEC用に開発した1本5万8千円の日本語ワープロソフトがなんと年間5万本の大ヒットになったのです。自分の開発したものが売れる。世の中に届く。私はここで、技術が誰かの役に立つという現実を初めて手応えとして掴みました。

ヒット作が出るとさまざまな会社から「自社用にも開発してほしい」という依頼が次々に来たのですが、私はすべて断りました。なぜなら時代は16ビットに移行しはじめていたことで、当時作っていたのは8ビット。16ビットに全振りしないと会社の将来はないし、時代遅れの商品をつくるのはエンジニアとしてありえない。しかしある日突然社長が言ったのです。「契約したよ、平野くん」。そして続けて「今日がなければ明日はない。そもそも平野くんは作ることしか能がない。売ることを全然わかっていない」。その一言で私は会社を去る決断をしました。会社にいる限り、契約した以上やらざるを得ない。ならば「いなくなる」選択をするしかない。マーケティングを学ぶために東京へ行く。1987年24歳のときでした。

エンジニアとしてのオファーは多かったのですが、とにかく「売る仕事」をしたかった。それを唯一許してくれたのが、Lotus 1-2-3で有名なロータス。製品プレゼン、メディア対応で価値の伝え方を磨いていきます。作る側の頭と売る側の頭が初めてつながっていく感覚がありました。そしてロータスが世界的にヒットしていくのですが、1995年にロータスはIBMに買収されます。会社カルチャーが変わるだろうし、私もそろそろ辞め時かな。そんな私がいちばん強く感じていた課題は「つながりなさ」。様々な会社のソフトに似たような機能があるのにデータはつながらない。これはインターネット時代に大きな壁になる。そこで私は本社に仕様公開を提案しましたが、当然却下されます。「囲い込みが成功しているのに、なぜ敵に塩を送るんだ?」マーケティングとしては至極正しい。私はここで初めて「会社の利益」と「社会の流れ」がぶつかる場所を体感しました。ならばデータの領域でつながればいい。ソフトウェアが違ってもデータを標準化すればつながる。そう考えていたときに現れたのが、XMLというデータ標準化技術です。私はパートナーとして今も一緒に走る現副社長の北原と、仕様書を読み込み「これで行く」と決めました。そして1998年9月、2人でXML専門ソフトウェア会社を立ち上げます。沼部の六畳二間のアパートから、世界をつなぐ夢が始まりました。